

たまのよこやま

東日本大震災

復旧・復興支援報告VI

令和二年六月一日三ヶ月振りに再開館
企画展示「シケイ考古学」開始!!

特集 東日本大震災復旧・復興支援報告VI

令和元年度の被災地支援事業

当財団では、平成 25 年度から（公財）福島県文化振興財団（以下、福島県財団）へ職員を派遣し、復興業務として発掘調査の技術指導を行っています。当財団からの派遣最終年度となる令和元年度は、国道 114 号改良工事（山木屋 1 工区）事業に伴う前田遺跡の発掘調査に携わりました。

国道 114 号は県北地域と相双地域を東西に連結する幹線道路で、「ふくしま復興再生道路」の一つに位置づけられています。しかし伊達郡川俣町小綱木地内から山木屋地内においては、幅が狭く、急カーブや急こう配が連続しており、安全で円滑な交通に支障をきたしています。これらを解消するため、当該地域の約 10km 区間について、道路拡幅工事やトンネル・橋梁建設工事が予定・実施されています。今回の発掘調査は、山木屋 1 工区内に所在する前田遺跡を対象とした工事に先立つ記録保存調査で、調査主体である福島県教育委員会から福島県財団が調査業務を受託して実施されたものです。

前田遺跡の概要

前田遺跡は川俣町小綱木字前田に所在します。NHK で現在放送中の連続テレビ小説「エール」の舞台となっている、あの川俣町です。遺跡は福島県の中通りと浜通りを分ける阿武隈高地を東方に臨む標高約 262m の河岸段丘上にあり、以前より縄文土器の散布地として知られていました（写真 1）。調査は平成 30 年度からの継続で、昨年度は国道 114 号に沿った 1,500 m² の範囲を対象としました。

調査の結果、縄文時代中期後葉（約 4,800 年前）～晩期中葉（約 2,800 年前）の生活痕跡が重層的に見つかりました。とりわけ中期後葉の自然流路跡（写真 2）では、漆塗りの木製容器（写真 3）、弓（写真 4）や斧柄等の木器、タケ・ササ類を組んだカゴ状の編組製品、また植物のタネ、キノコ、昆虫といった有機質の遺物が多量に出土しました。これらの有機質遺物は通常は腐食してほとんど残りませんが、前田遺跡の場合、遺物が含まれる低湿地（泥炭層）の上部を後世の洪水砂層がパックし、地下水によって外気から遮断されていたため、微生物による分解を免れて奇跡的に今日まで残されたのです。



写真 1 前田遺跡と周辺の景観

西方（中通り方面）から東方（浜通り方面）を眺めた様子。前田遺跡は阿武隈高地の山々に囲まれた緩やかな斜面地に所在しています。遺跡範囲を貫くように蛇行して走る道路が現在の国道 114 号で、調査期間中も除染作業のためダンプカーが頻りに往来していました。写真中央の国道 114 号に沿った南側のエリアが発掘調査区です。



写真 2 流路跡の調査風景



写真 3 赤色と黒色の漆で塗り分けられた木製容器

低湿地遺跡は、当時の生活や環境のあり方を示す情報が豊富に含まれた遺跡として、しばしば「タイムカプセル」とも呼ばれます。しかし縄文時代においては、台地上の遺跡に比べると全国的に調査例が少なく、縄文中期に限れば滅多にお目にかかれない貴重な遺跡です。その中であって前田遺跡は、漆塗りの木器などが「極めて良好な状態で」「多量に」出土しており、当時の木工技術の高さを今に伝えるうえで類稀なる遺跡と言えるでしょう。やや時代は下りますが、流路跡の周辺には竪穴住居跡や墓も多く見つっています。

印象的なできごと

令和元年10月中旬に発生した台風19号は、東日本の各地に甚大な被害をもたらしました。前田遺跡が所在する川俣町も例外ではなく、町内の約430カ所で土砂災害が発生し、遺跡近くの高根川に架かる橋は濁流によって流されました。台風の被害は遺跡内にも及び、浸水と土砂流入は凄まじいものでした（写真5）。遺跡の調査成果を一般に公開する現地説明会を2週間後に控えた出来事でした。

調査スタッフの中には自宅が被災した方もおり、その後の雨天も相まって現場はしばし休業にせざるを得ませんでした。再開後も足元に危険が伴うため一時的に低湿地への立ち入りを制限し、比較的安全な平坦地の復旧を急ぎました。説明会の3日前、ようやく流路跡での排泥作業に着手し、全スタッフの奮闘により、なんとか説明会に漕ぎつけたのです。

一時は実施が危ぶまれたものの、11月3日、前田遺跡の現地説明会が無事開催されました。当日は快晴のもと、地元住民の方々を中心に約200名の参加がありました（写真6）。また令和2年1月25日には出土品の展示や調査成果の発表を主としたイベントを福島市内で開催し、こちらは900名に上る来場者で大賑わいとなりました（写真7）。特に川俣町からの来場が多く、地元の方々に地元の文化財の価値を伝えることができたことがなよりの成果でした。

震災復興はまだまだ終わらない

今回の派遣にあたり、福島県教育委員会および福島県財団の皆様には大変お世話になりました。一年という短い期間でしたが、とても貴重な知識と経験を得ることができました。前田遺跡の発掘調査は今年度も継続して行われています。調査担当者の一人として、これからも前田遺跡の調査を陰ながら応援していけたらと思っています。（大網信良）



写真4 中央と両端に樹皮を巻き付けた弓



写真5 台風19号により水没した調査区



写真6 復旧後に行われた現地説明会の様子



写真7 出土品一般公開・発掘成果報告会のチラシ

の礫が、往来の人々の滑りやすい足元を支えたことが推定されます。

さらに、このように溝状に掘りくぼめれば、降雨時に路面に雨水が流れることとなり、人々の往来に不便な一面があるように思われますが、傾斜をゆるやかにするため、坂道となる区間をできるだけ長くするように工夫したものと思われる。

遺構の底面は比較的良好な状態で保存されていましたが、尾張藩が西御殿を拝領した後に、道路として使われなくなって以降、短期間のうちに埋め戻されたものと考えられます。

この遺構が当時の市谷邸のどの辺りに位置していたのか、宝暦13年（1763年）当時のこのあたりの様子を描いたとされる絵図「御府内往還其外沿革図書」に照らし合わせてみると、東御殿の北西付近で、現在の市谷加賀町二丁目と接するあたりとなります（図1）。この絵図に描かれているのは西御殿拝領前の様子であり、「尾張殿」と書かれた場所は東御殿にあたります。そこには、東御殿の境界に沿って南北に延びる道路が描かれていますが、これに位置や方向が一致することから、305号遺構はこの道路に相当する可能性が高まりました。絵図では、道路のさらに西側にも、旗本屋敷や大名屋敷が描かれています。

今回の調査では陶磁器、土器や金属製品のほか、木製品も出土しており、その中には尾張徳川家の家紋である三葉葵が描かれた、桶の蓋とみられる円形の木製品がありました。直径約20cm、厚さ約1.2cmで、把手は失われています。三葉葵紋は直径約5cmで、色漆を使用しており、黒漆で葵の葉身を塗った上から朱漆で細い線を描いて葉脈を表現しています。（写真5）。

この遺物が出土した遺構は深く、調査中も絶えず地下水の湧出がありましたので、埋没した時から遺物は絶えず水に浸された状態となったことで、腐朽が進まず長く保存されたと思われます。

なお、前年度の調査でも、家紋とみられる葵の文様を配した瓦の一部が出土しています（写真6）。
（寺西朗平）



写真3 305号遺構底面 轍痕跡検出状況（北から）

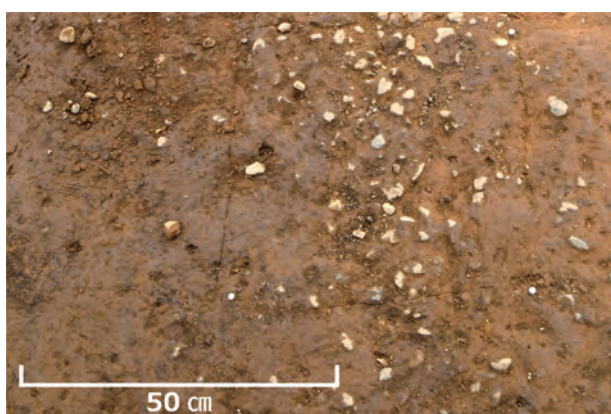


写真4 305号遺構 礫（砂利）検出状況



写真5 出土遺物（桶蓋・536号遺構出土）



写真6 出土遺物（瓦・平成30年度調査時出土）

かゆい所に手が届く

遺物の基本的な見方 石器編②

まずは写真をご覧くださいませう。図1に上げたのは、多摩ニュータウンNo.769遺跡から出土した細石刃および細石刃核の写真です。丁寧に形を整えた小さな石のかたまり（細石刃核）から、押圧剥離という技術によって同じ大きさの細い石の刃を連続して作り出しています。押圧剥離（動物の角等で圧力かけることによって、石の欠片＝剥片を取る方法）によって細石刃をとる技術は、旧石器時代も終わりに近づいた頃に生まれたもので、いわば「最新」の旧石器です。木や骨の軸に複数の細石刃をはめこんで、槍先として使ったものと考えられています。「最新」があるのであれば「最古」もあるはずですが、旧石器時代最初の、つまりは人類最初の石器というのはどういったものだったのでしょうか？

まずは人類のはじまりの話から始めましょう。そもそも人類は「直立二足歩行する類人猿」と定義することができます。現在の地球には、我々ホモ・サピエンス以外にもチンパンジーやゴリラ等の類人猿が生息していますが、そのなかで通常時真っ直ぐ立って二本の足で移動する＝直立二足歩行するのはホモ・サピエンスだけです。現在はホモ・サピエンスしか人類はいませんが、過去の地球上には他の人類が何種類も存在していました。ネアンデルタール人（ホモ・ネアンデルターレンシス）や北京原人（ホモ・エレクトゥス）といった名前を聞いたことがあるかもしれませんが、彼らはすでに絶滅してしまった人類です。そして直立二足歩行する類人猿＝人類が地球上に最初に発生したのは、700万年前ころのアフ



図1 細石刃核（上2段）と細石刃（下2段）
多摩ニュータウンNo.769遺跡出土

リカであると考えられています。

チンパンジーが道具を使うように、彼ら最初期の人類も木の枝等を道具として使っていたと思われませんが、少なくとも石を加工して作った道具＝石器は見つかっていません。石器が初めて出現するのは約300万年前頃で、この「石器の出現」を指標として「旧石器時代」のはじまりが定義されています。それではこの頃に使われていた石器とはどういったものだったのでしょうか？

図2に上げたのは、大英博物館に所蔵されている、アフリカのタンザニア・オールドバイ溪谷から出土したチョッピング・ツールという石器です。玄武岩の塊の一部分（写真上部分）を両方向から二三次打ち欠いて、鋭い刃を作り出していますが、それ以外の部分はもとの石の表面がそのまま残っています。栄養分に富む骨髄を取り出すために動物の骨を叩き割る等、色々な用途に使われたものと考えられています。「最新」の細石刃と比べると、ごく単純な方法で作られています、これが旧石器時代「最古」の石器の一例です。

チョッピング・ツールのような石器から細石刃に至るまで、200～300万年といった長い時間をかけて石器製作の技術が進化してきたわけですが、一方でチョッピング・ツールのような「単純」な石器が全く使われなくなったわけではありません。細石刃が使われるような時代になっても、礫に簡単な加工のみを施したような石器はしばしば見つかります。古いから、新しいからではなく、旧石器時代の人類は必要に応じて様々な石器を作り分け、使い分けしてきたのです。（舟木太郎）



図2 チョッピング・ツール
©The Trustees of the British Museum CC BY-NC-SA 4.0
https://www.britishmuseum.org/collection/object/H_1934-1214-1

今回は昭和 62 年(1987)に実施された普願寺跡(多摩ニュータウン No.105 遺跡の一部)の発掘調査とその際出土した中世陶器について紹介します。

普願寺については江戸時代後期に編纂された『新編武蔵風土記稿』の多摩郡越野村の項に、大石信濃守宗虎を開基とする新義真言

宗の寺院であることが書かれています。宗虎はかつて滝山城主であった大石定久の弟あるいは次男とされる人物で、元龜 2 年(1571)に没しています。普願寺は明治時代の廃仏毀釈の影響もあり廃寺となったようですが、八王子市越野の丘陵

南斜面中腹に、寺跡とされる段切り状の平地が昭和の時代まで残っていました。

調査を進める過程で普願寺の建物本体に関わる柱穴や礎石等は検出されなかったものの、井戸や池跡、土坑等の遺構が検出され、また陶磁器・土器類や硯・砥石等の石製品類の遺物が出土しました。遺物は主に江戸時代に属し、特に際立って特徴的なものもないまま、調査も終盤にさしかかった頃、作業員さんから、「徳利の口のようなものが出ていますよ」と声がかかりました。直ぐそこに行き、地面をみると確かに直径 2 cm ぐらいの徳利の口縁部らしきものが認められ、状況からそれは垂直に立った状態で埋まっているようでした。その場所は平地の中央だったので、なぜこんなところに単独で徳利があるのかな、というのが最初の印象です。どうせ貧乏徳利の類で、その口頸部から肩部を見れば、産地や年代が判るだろうと思いつつ、口縁から

頸部周辺の土を取り除き、さらに肩部まで出したところで、一瞬目を見張りました。口頸部の中段に突帯、釉薬は淡緑色灰釉、そして肩部に唐草文様。その特徴からもしや古瀬戸の梅瓶ではないか。当日は作業終了時間も迫り、また金曜日だったこともあり、盗難防止

に備えてその場の養生を入念に行い、作業を終えました。週明けの作業再開が待ち遠しかったことを覚えています。

はたして“徳利”は古瀬戸の梅瓶の完形品(高さ 18cm)でした。印花(スタンプ)技法により体部上半は唐草文、下半は連弁文が施されたその特徴から、その生

産地は瀬戸窯、製作年代は鎌倉時代末(14 世紀初頭)です。それにしても何故、この梅瓶は平地の中央から単独で出土したのでしょうか。事前に梅瓶を埋置するための穴も掘られていることから、他所から偶然流れ込んだものではなく、人為的であることは明らかです。想定できるのは普願寺を立てる際、地鎮のために埋められたということです。宮殿や城郭、寺院などの発掘調査により、建物跡の下から地鎮遺構が検出された事例は知られており、普願寺跡の場合もその可能性があります。ただ不思議なのは、普願寺開基の大石信濃守宗虎が 16 世紀代の人物にもかかわらず、梅瓶の 14 世紀初頭との年代差があることです。普願寺を建立した当時、たまたま手近にあった梅瓶をその由来を知らずに使ったのでしょうか。文化財を金銭的な価値で評価するのはためらいますが、今の時代であればそれなりの値がつく逸品です。もったいないことをしたな、と野暮な感想です。

普願寺跡出土の梅瓶は、現在、東京都立埋蔵文化財調査センターの展示室でご覧いただくことができます。

(内野 正)

1/964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

44 普願寺跡(多摩ニュータウン No.105 遺跡)



写真 1 普願寺跡出土古瀬戸瓶子



「方法」の大切さ

—企画展示 **リケイ考古学** に寄せて—

新型コロナウイルス禍によって、前代未聞の幕開け(?)となってしまった企画展示「リケイ考古学」。当センターも感染拡大防止のため2/29(土)より臨時休館しておりましたが、この原稿を執筆している5月下旬に首都圏に対する非常事態宣言も明け、6/1(月)の再開館が決定しました。現在も感染者への必死の対応を続けられている医療従事者の方々、社会活動維持のために奮闘されている様々な分野の方々に敬意と感謝を表したいと思います。

今回のウイルス対策の難しい点の一つは、相手が目に見えないウイルスであるため、市中における感染状況を正確に把握することが難しい点にあります。ウイルスの性質や感染の状況は、数学などのように定理に基づいて演繹的に解釈できるものではありません。この件に限ったことではありませんが、ものごとを正しく把握し、確かなエビデンス(証拠)をもとに解釈を行うためには、何らかの方法を用いて現象を観察し、積み上げた多くのデータをもとにして一定のパターンを導き出していく必要があります。



考古学も同じです。考古学にとってなにより重要なのは、発掘された住居跡や土器がいつの時代のモノなのかを明らかにすることです。そのため、考古学では「層位学」と「型式学」という二つの方法が学問の柱として用いられてきました。

層位学とは、下の地層のものは古く、上の地層のものは新しいという「地層累重の法則」に基づきます。発掘調査では、地表面からローム層に至るまで、人類が残した様々なモノが見つかりますが、それらの帰属する地層が年代決定の大きな手掛かりになります。

一方の型式学は、類似した特徴をもつ遺構や遺物を一つの時間や空間、また文化のまとまりとみなし、その形の変化によってモノの相対的な位置づけを決定する方法です。このとき、①ある地域のある時代のモノは共通した形で作られる、②モノは古い形を

残しながら徐々に変化していく、という二つの仮定のもと、各型式の分類と配列を行います。

考古学では、この二つの方法を組み合わせ、また互いに補い合いながらモノの相対年代を決めているのですが、実はこの方法は地質学・生物学生まれ。すなわち、理系の方法だったのです。

今回の企画展示は、印象的にするために「リケイ考古学」というタイトルを掲げましたが、考古学は、実はもともと「理系の頭脳、文系のハート」をもった学問なのです。そしてその頭脳は日々進化していきます。ついに開幕した「リケイ考古学」。令和の時代における考古資料と分析・保存方法のハーモニーをぜひご堪能ください。



新型コロナウイルス感染拡大防止のため、しばらくの間はご来館に際しお客様にお願いすることも多く、年間行事や団体見学の中止・日程変更など、ご不便をおかけすることもあると思います。感染症をめぐる情勢を注視しながら、一日でも早く「新しい生活様式」にマッチした施設運営となるよう努力してまいりますので、当センターにお越しの際は、事前にホームページで(この際ですからぜひブックマークいただき)最新情報をご確認いただいた上でご来館ください。ご理解とご協力をお願いいたします。(長佐古真也)



企画展示の様子(中央はあきる野市前田耕地遺跡16号住居跡の原寸大ジオラマ)

※今号の表紙：遺跡庭園で初めて咲いたキンラン(2020年5月撮影)



たまのよこやま 121

2020年7月15日発行

東京都埋蔵文化財センター

〒206-0033 多摩市落合 1-14-2 TEL 042-373-5296 <https://www.tef.or.jp/maibun/>